

## タンホイザー伝説——ペイターとワイルド

富士川 義之  
(東京大学教授)

19世紀にタンホイザー伝説を掘り起こしたのは、早くはティークやハイネなどドイツの文学者たちであった。なかでも1845年にドレスデンで初演されたワーグナーのオペラ『タンホイザー』が、世紀末の時代にかけて、ヨーロッパにおいてほとんど圧倒的と言ってよいほどの広汎な影響を及ぼしたことは言うまでもなからう。同じ中世伝説でもアーサー王伝説を競って取り上げていたヴィクトリア朝盛期に、それまで馴染みの薄かったタンホイザー伝説を持ち込んだのはスウィンバーンである。

スウィンバーンの詩『ヴィーナス讃歌』には、美貌の吟遊詩人タンホイザーが、ヴェヌスベルクの洞窟にあるヴィーナスの宮廷で7年間歓楽の時を過ごすさまが描かれている。その中世伝説自体のうちにすでにデカダントな要素が含まれていることは明白だが、スウィンバーンはそうした要素を唯美主義風に誇張拡大し、ヴィーナスを世紀末風な「宿命の女」として形象化している。したがってこの愛の女神は、「エロティシズムと残酷さ」を兼備した「無慈悲な女神」に変貌しているし、その洞窟には打ち棄てられた恋人たちの死骸や骨が散乱している。と同時に、この邪悪なヴィーナスは、男を惹きつけてやまない官能的魅力と女性的優美さを身につけている。タンホイザーもまたヴィーナスに劣らずデカダントな人物で、ヴィーナスとの官能的愛を讃美することに余念がなく、ローマ教皇に赦免を拒否されても動じることなく、救済の観念を鼻であしらい、悔悛のそぶりも見せない。彼にとっては異教的な官能的愛への耽溺がすべてであり、キリスト教的な罪を犯すことがほとんど快楽に等しいものとなっている。

こういう官能的愛の讃美は、のちにピアズリーが『ウェヌスとタンホイザーの物語』という未完の作品で、ポルノグラフィックな物語に仕立てることになるのだが、スウィンバーンからピアズリーにいたる異教主義的なタンホイザー伝説への関心を、ペイターとワイルドがある程度共有していたことは疑いない。ペイターもワイルドも明らかに『ヴィーナス讃歌』を読んでいて、ボードレールのタンホイザー論にも眼を通していた。『ヴィーナス讃歌』が、ヴィクトリア朝の既成道徳に対する大胆な反逆と攻撃されたことから知られるように、スウィンバーンは、タンホイザー伝説を、ペイターの言葉を借りれば、「時代の道徳的・宗教的理念に対する反逆や反抗の精神」を表白するための手だてとして利用したのだった。スウィンバーンほど露骨ではないにせよ、「中世ルネサンス」を探

り当てていき、中世における「反逆や反抗の精神」を強調するとき、ペイターもまた、同時代の因襲的道德や理念を打破し、精神と思想の自由を希求する意図を秘めていたのである。「古い異教の神々の復帰」に寄せるペイターの執着は、たんに唯美主義的な興味のみにとどまるものではなかった。しかもペイターの場合特徴的なのは、反キリスト教的なスウィンバーンとは異なり、異教とキリスト教の融合ということを彼自身の内的必然性に促されて、生および芸術の主要課題としていることである。ペイターにとって、ルネサンスの魅惑とは、何よりもまず、古代宗教とキリスト教の一致が示されているところにあった。タンホイザー伝説におけるヴィーナスへの関心は、そうしたルネサンスの特性を予示した、精神的文脈のなかで把握しなければならない。

ペイターが古代のヴィーナスの復帰（これは例の「モナ・リザ」への関心に直接結びついていく）にもっぱら興味をもったのに対して、ワイルドはヴィーナスよりもタンホイザーに深く心を寄せていた。そしてしばしばタンホイザーを自分に擬するのである。たとえば『ドリアン・グレイの画像』には、「うっとり喜びに浸りながら『タンホイザー』に耳を傾け、その偉大な芸術作品の序曲のなかに、自分自身の魂の悲劇の表現を認める」ドリアンが描かれる。ドリアンだけではない。「エロスの園」や「訪れざりしローマ」などの詩篇においてタンホイザーと詩人は同一視されて提示されるし、「批評家としての芸術家」のなかでも熱をこめてタンホイザー序曲がかき立てるさまざまな官能的印象や情念などが語られている。

とりわけ興味深いのは、ワイルドが他方では、デカダントなタンホイザーだけでなく、悔悛し救済を求めるタンホイザーに共感していることである。「ああ、私が死ぬ前に／唯一の神に聖別された王を見る喜びよ」（「訪れざりしローマ」）とあるように、ワイルドはのちにレディング監獄で経験することになるキリストへの関心をすでに明示している。タンホイザー伝説は、ワイルドの場合、キリストへの関心とも結びついて表現されていることに注目しなければならない。